紀小鹿女郎の歌一首

一六六一番

ひさかたの　月夜を清み　梅の花　心開けて
我が思へる君

大伴田村大嬢、妹坂上大嬢に与ふる歌一首

一六六二番

沫雪の　消ぬべきものを　今までに　流らへぬる
は　妹に逢はむとそ

大伴宿禰家持の歌一首

一六六三番

沫雪の　庭に降り敷き　寒き夜を　手枕まかず
ひとりかも寝む